

## 2. 子どもシェルター「ピピオの家」退居者の声

子ども担当弁護士

儀保 唯

前段の2件の活動報告を通じて、居場所のない子どもたちをめぐる実態や課題を一通り理解した上で、さらに具体的なイメージを思い描く一助とするため、退居者の声を聴いた。

### 司会(菅谷)

次に、子どものシェルターピピオの家の退居者の声を紹介いたします。退居者の子ども担当弁護士として担当されていた儀保 唯先生に、内容の説明をしていただきます。儀保先生よろしくお願ひいたします。



報告者 儀保 唯

### 儀保

はい。まず、先に、退居した子どもの声を聞いていただきたいと思います。

### 音声(退居児(10代・女子)本人が書いて読み上げてくれたメッセージを、録音で聴いた)

「ピピオへ辿りつく前は、ずっと10代が終わる前に、全てを片付けようと決めていました。シェルターに入って得たものも失ったものも、どちらも大きくて、正直、悔しさとみじめさでいっぱいなのが本心です。今は、思い描いたような未来とは違いすぎるけど、空想じゃなくて、現実的にできることを、実際に毎日して、何かに確かに近づいている気がします。」

### 儀保

弁護士の儀保 唯と申します。最近私が担当した子どもの声を、今、聞いて頂きました。

この子は、一か月半くらい前にピピオから退居した子です。

今の話の中で、「失ったものがある」とは、この子が入居している間に大事な方が亡くなっていたことを知らなかった、ということを示しています。また、「得たものも大きい」とは、「まずは家を出られたこと、そして、ピピオで勉強を教えてもらえたこと、色んな人と出会えたこと、生きるための力、生きるために必要な事を教えてもらったこと」だと話していました。

私がこの言葉を聞いて「ああ、この子変わったな」と思う所は、最初にピピオに来た頃、退居後どうしたいか尋ねたら、実現困難と思われるような事も話していたのですが、この半年間一緒に悩んで、「どういう道が着実に着ける道だろう？」と一緒に考え、やっと退居に繋がった時に、このような言葉を聞けた事です。本当に成長したなと感じました。

今でも、1~2週間に一度、電話がかかってきて、就労先でのことや、人間関係の悩みなどを話してくれます。泣いて「もうやめたい」って言う時もあるけれども、それでも、「こういう時にはこうした方がいいんじゃないか」と一緒に考えて、今、毎日休むことなく働いています。

このような場で子どもの声を紹介することができて、今回子ども担当を初めて担当したのですが、やってよかったと感じています。ご清聴ありがとうございます。